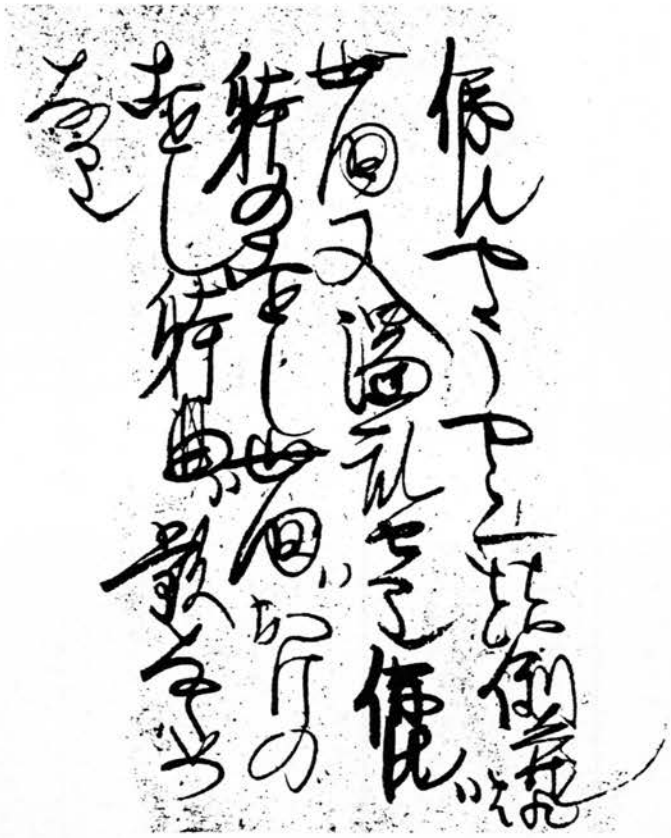
今月の御聖訓



仏法やうやく顛倒しければ
世間（も）又濁乱せり。仏法は
体のごとし。世間はかげの
ごとし。体曲（れ）ば影ななめ
なり。

【諸経と法華経と難易の事　全集九九二頁】

目　　次

今月の御聖訓
巻頭言……菅野憲道　1
恵日だより〈お会式を奉修〉……2
お会式布教講演大聖人の信仰を土台とした人生感……築瀬明道　3
天地つかの間〔その⑩〕……成田詳道　9
「弟子分帳」と十七回忌〔四〕……松田銘道　10
ちょっと寄り道⑩〈ラジアンって何だ？〉……森田観道　15
【寄稿】信行の実践教学のすすめ……猪股正治・正豪　16
ある創価学会学会員の妻の記録〈二〉……仲井絲江　18
12月の行事　今月の宅お講　師走詠草　恵日俳壇

表紙　写真撮影:松井義信氏　題字:立正安国論より拝写

巻頭言

還着於本人

菅野憲道

最近、またまた日本帝国主義による朝鮮半島侵略の歴史をめぐって、某大臣が問題発言を行い、韓国や中国の強い反発をひきおこした。今年は戦後五十年の節目にあたっての国会決議や総理の総括的謝罪の談話があったにもかかわらず、何度もくり返す騒動をみているとずいぶん根深いものがあるように感じられる。

概して日本人とアジアの人々の間には、第二次大戦の歴史認識をめぐって、ずいぶん大きな隔たりがある。日本人が毎年八月十五日を終戦記念日として、悲しみのうちに全国戦没者慰霊祭を行い、原爆や空襲等の戦争の悲劇と反戦の決意を伝えようとするのに対し、東南アジアの国々では、韓国の光復節に代表されるように、むしろこの日を民族解放の記念日として、国民あげて祝うのが普通である。このような国家間における歴史認識のギャップは、今後も多くの摩擦を引き起こすに違いない。

歴史を認識するということは、自己の存在を相対化して、過去からの社会的因果関係の中に位置づける作業であり、歴史をどのようにみるかということが、そのまま自己を規定することに通じるのである。

また過去をいかに見るかは、現在を歴史過程の何なる段階ととらえるかという歴史意識でもあり、さらには、未来に向けて、自身の行動を方向づける契機ともなるのである。

したがって、かっての皇国史観のように、神話と歴史を混同するようなゆがんだ歴史認識が、悲劇的結末しかもたらさなかったように、情緒に流された回顧や、自己本位の主観的な歴史観は、他人と共有することのできない空想にすぎず、自己矛盾に陥って早晩行きづまらざるを得ない。それゆえ、歴史認識には自他ともに認められる厳格な公正さを求められるのである。その意味で今回提案のあった、韓国や中国と日本の間で共同で歴史の研究を行おうということは、真のアジアの平和と繁栄のためにも大へん重要なことだと思うのである。

それにしても、お粗末なのは宗門執行部や創価学会の歴史認識である。年表等著作物や記念碑等の構造物を何年もたたないうちに消し去っては作りかえる愚行をいつまでくり返すつもりだろうか。意図的に年表から不都合な事項を抹消してみても、何れ、そのことが自らの首を絞めることになる事に気づかないのだろうか。宗門にも、客観的かつ公正な歴史が語られる日を待ち望むのである。

宗祖日蓮大聖人お会式を盛大に厳修

末法の御本仏の常住不滅を寿ぐ

錦繡（きんしゅう）に山々が色づく十一月十一（土）・十二（日）の両日、源立寺において、宗祖日蓮大聖人の常住不滅を寿ぐお会式法要が厳修されました。

〈御逮夜〉

定刻十分前に喚鐘の音が鳴り響くと、法要は午後七時の出仕鈴とともに始まりました。

法要は、如法に読経、申状奉読（成田執事・大谷吾道師・尾林講頭・橋本副講頭・山本副講頭・佐久間幹事）、自我偈、唱題と滞りなく進められました。

法要終了後、住職よりお会式の意義についての指導の後、大谷吾道師による講演がありました。

小憩の後、お題目講が修され、午後九時半の法要を終了後、心づくしの御酒とご馳走を頂きながら歓談し、なごやかなうちに散会しました。

〈御正当会〉

一夜明けた十二日（日）午後二時より、お会式の御正当会が、檀信徒多数参詣のもと厳粛に奉修されたました。

当日は、午前十時より婦人部・役員が相次いで集合、設営等の諸準備を手際よく済ませ、法要に備えました。

定刻、出仕鈴が打ち鳴らされると、まず住職によって仏祖三宝尊への献膳、次で方便寿量の読経、「而説偈言」にて日有上人申状、立正安国論、歴代上人申状が住職並びに教区ご住職方によって捧読され、引き続き自我偈、唱題と如法にすすめられました。

法要終了後、広宣寺住職築瀬明道師より布教講演（別掲）をたまわり、引き続き、お花くずしへと移り、御宝前を飾っていた桜花のお飾りがくずされ、参詣檀信徒は桜花とお供物をいただき、大聖人様のご精神心を胸に、帰路につきました。

御会式布教講演（要旨）

平成七年十一月十二日（日）　御正当会

大聖人の信仰を土台とした人生観

広宣寺住職　簗瀬明道

皆さんおめでとうございます。

源立寺の御会式が、皆さん方の深いご信心に依りまして、いつも荘厳に行われていること、大変尊くまたおめでたいことと感じておる次第であります。

《経済成長の時代とその後》

今年は八月で、戦後五十年ということでしたが、この間、あの焼け跡の中の立ち上がりから四十年くらいは、高度の時もあれば普通の時もありましたが、とにかく経済成長をずっと続けてきた時代でありました。しかし、数年前の、俗にいう頂点のバブルがはじけて以後今日に至るまで、色々な面で我が国は様変わりをしております。

この成長時代とバブル以降、そしてこれからのことを一人の人間の生き方というところに焦点を当てた場合、そこには色々な違いがあるのではないかと、私なりに考えてみたことがあります。

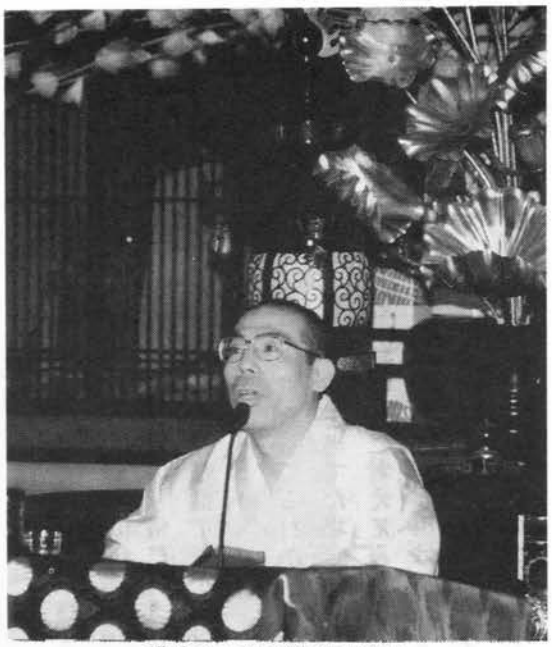
例えば、成長時代といいますのは、雇用は黙っていても保証されていた時代でありました。当時、よく私たちの学生時代の友達が「安月給だ。安月給だ。」などと歎いておりましたが、とにかく若い時は会社にしごかれても、必ずそれは将来に報われていくということを、誰でもが信じておりました。ですから、なんとはなしに大きな安心に包まれている、といった部分があったと思うのであります。

しかし、バブルがはじけたこれからは、おそらく終身雇用制などは、見直されていく速度がだんだんと速くなっていくと思います。そして、実力主義の年俸制であるとかリストラがもっと進められ、今まではその会社に勤めていたなら、定年まで勤められると思っておったのが、そうはいかない時代になっていくのであります。

また、経済成長時代といいますのは、黙っていても経済は成長し豊かになっていくものだということが、暗黙のうちに考えられていたのであります。この考え方が、人生を考える上での主軸・柱になっていたのであります。

この考え方が柱でありますから、それに付随して色々な場面を考えても、誰もが大体同じような考え方になっていたのであります。言うなれば、横並び指向ということです。

そういう横並び的な考えの中にあっては、一つの組織の中で、


講演をされる築瀬明道師

何か事件が起こった場合でも、温情的に物事の解決がなされてきましたから、人々に甘えの気持ちなども生じさせていたと思います。

しかし、経済は成長するものだという考え方の主軸が成り立たなくなってくると、物事に対する考え方というのも、人それぞれが色々な考えや答の出し方をしてくるのではないかと思います。当然そこには、今まで以上に意見の衝突・対立が生じて、自分を立てていこうと思うならば、強く自分を主張していかなければならない、という状況にもなると考えるのであります。

さらにいうと、経済成長時代は、一言でいうと他人まかせにしていても、安心のできた時代でありました。会社が豊かであり、人手不足ということもあって、社員が病気したり事故にあっても、会社を挙げて家族を守る、面倒を見るといったこともあったと思うのであります。

あるいはまた、自分自身に困ることがあって、人様に相談した時でも、大方返ってくる答えは、あまり違わない答えが返ってきていたのではないかと思うのです。しかし、これからは相談する人によって答がまちまちで、迷うようなこともあると思います。即ち、自分のことは自分で決断し、処理していかなければならなくなっていくと思うのです。

《求められる確かな人生観》

我われは、戦後の三・四十年間高度経済成長の中におりましたから、いつの間にかどんどん便利になっていくのが当たり前だと、誰もが信じてきました。しかし、新聞や書物を読みますと、本当は日本の成長などというのも、実は「東西冷戦」という世界の枠組みの中で、「漁夫の利」を得ていたと言えるのではないか、とまで書かれておりますから、この話を聞いた時に、まさに冷戦が終結したからバブルがはじけ、このようになってきたのかと思いました。

逆に、世界の構造が変わったこれからは、企業にしても日本にしても、そして個人にしても、もう他人任せではなく、自分のことは自分でやっていかなければならないということであります。

その一番いい例が、最近起こった大和銀行の事件だと思います。当然不正があったのですが、突然営業をしてはいけないという判断が下されましたから、日本の経済界は上も下もびっくりしておりますが、これは今まで随分温情的だったことが、もはや通用しなくなったということであります。そして、そのアメリカの処置で一番ショックを受けているのは、当の銀行よりも日本の大蔵省だともいわれております。

ですから、これからは政府も、今までとは違った厳しい態度で、銀行や企業に望むでしょうから、当然それは回りまわって一人一人の国民に対しても、厳しくなっていくものと思います。

そのように見た場合、一人の人間が確かな人生を歩もうと思えば、それなりのしっかりとした見解を持って、人生の目的、そしてその値打ち、さらにそれを実現していく手段、そういうものをしっかり見定めた生き方が、求められるのではないかと思うのであります。

今まで三・四十年間頑張ってきた成長時代のものの考え方は、通用しなくなってくるのですから、これからは根元のところから見方を変えて人生を考える必要があると思うのです。

一言でいえば、確かな人生観を持って生きていこうということなのですけれども、人生観などということをいわなくても、大方の人はそれなりに自分の生き方とか、考え方というものは持っているはずです。けれども、それらは本当に真正面に見据えて、自らが導き出した答ではないと思います。いうならば、それは戦後のシステムや経済環境の中で、知らず知らずのうちに身に付いてきたものです。あるいは戦前のように、時代の思想に押し流されるようにして、自分の人生に対する見方が出来上がっていった時代もあるでしょう。あるいはまた自分自身の健康であるとか、家庭環境であるとか、育ちの中に育まれて、それなりのものが形作られてきたものもあると思います。

しかし今私が言いたいのは、自らが意識的に心を働かせて、主体的に心を巡らせて自分自身を見つめ、自分を知り尽くし、そして自分の生き方を定めていく、そういう人生観を一人一人が持つことが、大切ではないのかということであります。

《定まりがたい人の心》

では、仮りにそのような人生観を定める場合に、何によって定めるのかといいますと、それは心です。

しかし、この心に自分の人生を間違いのないものに見定めていくだけの値打ちがあるのだろうかと考えますと、非常に不安な部分があります。

卜部兼好は「徒然草」の中で、

「心は縁に引かれて移るものなれば云々」

といっておりますが、心は必ず周りの何かを縁としてあるものです。即ち、世の中に生活している以上、世の中の動きに無縁な心などはあり得ないのです。なにがしかの影響を受けて、自分の心は出来上がっているのであります。

仏法では、世間というものは、どれ一つとして絶対に変わらない常住なものなどはないといいます。皆移り変わっていく無常なものであるならば、それらを縁として起こる心というものも不変なものではなく、やはり移り変わっていく無常なものであります。

そしてまた、その心は、三世を相続して移り変わっていくものです。今日の心は、昨日を土台（因）にして、一つの形を作っています。明日の心は今日の心が因になっている、そしてもろもろの縁を加えて、明日の心が結果として出てくるのです。いうならば、こころは移り変わっていく無常のものであって、絶対不変のものではないといえるのです。

さらに、心にはその人固有の心というものがあります。これは性分とか気質と言葉を変えてもいいのですが、同じ父と母から生まれ、同じ環境の中で育っても、子供の心が皆んな違うように、厳しい人もいれば優しい人もいるし、何を見ても楽観的な人もいればひがみっぽい人もいます。

ですから、人生観を決める時には、意識的・主体的に心を働か

せといっても、心自体がそれぞれに癖があり、移り変わっていくものですから、そういうもので本当の正しい人生観を定めることができるのかという疑問も起こってきます。

この心の心許ない話は、先ほど住職が読まれました「立正安国論」の中に、

「**但し人の心は時に随って移り、物の性は境に依って改まる。譬えば猶水中の月の波に動き、陣前の軍の剣に靡くがごとし。**」

（全集三一頁）

とあります。人の心の頼りにならないことは、まさに水に浮かぶお月さんのようなもので、きれいな形でいたいと思っても、風が吹いて波が動けば月は揺れてしまう。あるいは、自分は立派な鎧をつけて戦場に出て、憶病なく敵と闘うぞと思っていても、いざ戦陣に出て、敵の軍勢の鋭く威勢のいい剣の前に立つと、否応なく退散していかなければならない。そのように儚いのが人の心だ、との仰せであります。

現代人は「自分の良心に云々」という言い方をして、自分の心を高く評価しているようですが、いずれの歌も、我が心というのは非常に警戒を要するといっておるのであります。

これについては、同じく大聖人様も涅槃経を引かれて、多くのところに、

「**心の師とはなるとも心を師とせざれ**」

と、誡められておるところであります。

このように、我が心でもって、自分の確かな人生観を定めたいと思っても、少しも当てにならないならば、結論的にいえば、法華経の信仰の心を土台にした人生観を持つべきであると、私は思うのであります。

この場合の法華経の信仰とは、日蓮大聖人様と、三大秘法の妙法蓮華経であることは当然であります。

《宿縁深厚の妙法》

さて、心が縁に触れて働くものであるならば、今我われは縁深くして法華経の信仰に縁しているのであります。宿縁深厚ともいわれますように、過去世からの深く厚い因縁によって、今我われは妙法蓮華経の信仰に巡り会えているのであります。このご縁によって大聖人様の南無妙法蓮華経の信仰をしているという厳然たる事実を、重く感じて積極的に受け止めていただきたいと思うのであります。そして、そのような信仰の心を土台にして、人生を定めることが大事であると思うのであります。

大聖人様は御書の中に、法華経のご文を引かれて、

「今南無妙法蓮華経を唱えることのできる人は、過去に十万億の仏を供養した人で、その人が末法に生まれて法華経に縁するんだ」

ということを、多くのところでいわれておりますが、これは、ただ過去に縁があったから今法華経の信心ができたんだというだけではなく、だからこそ、この事実を非常に重く受け止めなさい、と仰せであると捉えるべきだと考えます。

例えば、大聖人様が佐渡に行かれた時に、最初にお弟子になられた最蓮房というお方は、自分はいたらない弟子でありますが、弟子になった以上はよろしくお願いします、と大聖人様に申されたのですが、その時に大聖人様は、

「（貴方と私は）**過去無量劫より已来師弟の契約有りしか。我等末法濁世に於て生を南閻浮提大日本国にうけ、忝くも諸仏出**

世の本懐たる南無妙法蓮華経を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫(もてあそ)ぶ事、是れ偏に過去の宿習なるか」

（全集一三四〇頁）

と、決して偶然ではないというこの事実には大変重いものがありますよ、といわれています。

さらに、「諸法実相抄」などにも、

「法華経の行者となる事は過去の宿習なり。」

（全集一三六一頁）

しからば、

「ともかくも法華経に名をたて身をまかせ給うべし。」

（全集一三六〇頁）

とも仰せであります。

このような大聖人様のお言葉に、我われは今大聖人様の仏法に縁し、信仰しているという事実を、ありがたいことと積極的に受け止めて、そこから何を手にしていくのかという、答えを出していきたいものだと思うのであります。

もう少し具体的にいえば、大聖人様の仏法に縁しているならば、大聖人様の生き方に自分の生き方を見定めていく、あるいはその説かれる法華経の教えに則った考え方を根底に据えた人生観を、立てていくべきではないかということであります。

《大聖人の生きざまに触れる》

もちろん、宿縁深厚であるといっても、その中身がいい加減であってはならないのですが、大聖人様の信仰・法華経の信仰は、まさにその中身がすばらしいのであります。

先ほど、自分の生き方を大聖人様の生き様に求めていけといいましたが、その生き様は、計り知れないスケールの尊いご一生であられました。いくつか徳目を上げれば、非常に正直で、勇気があり、権力にも諂わず、それでいて人情味が深く、腹の据わっていた方でありました。

一切経の中で、法華経のみが成仏できる教えだと答を出されたのは、大聖人様が非常に正直だったからであります。どのお経が本当の釈尊の正義なのかと真剣に考えられていった時に、その教えに則って正直に答を出したのが、法華経の信心だったのであります。

そして、一度(ひとたび)答が定まったならば、大難四ヵ度小難数を知らずというような色々な妨害があっても、びくともせずに進まれていかれたのでした。あの鎌倉幕府という権力に対しても、一歩も引かず堂々と立ち向い、また、甘言で誘われても決してそれに諂わない姿は、人の生き方としては最高のものであると思います。

それでいて、御書を拝しておりますと、大聖人様は強さ一偏ではなくて、本当に人情味の厚い方であります。子供を亡くした母親に対するお手紙を読んでいますと、こちらまで泣けてきてしまいます。また、年老いた婦人に対するお手紙などをみても、情味のある言葉が出てまいります。

私は、日妙聖人が困難なことを承知で小さな女の子を連れて、佐渡の大聖人様を訪ねられたのは、教えも当然のことながら、大聖人様の人情味厚い、幅の広さを慕い慕って渡られたのではないかと思います。また、佐渡の阿仏房が、千里の道を厭わず何度も佐渡から身延山に行かれたのも、やはり大聖人様のすばらしさがあったからだと思います。そして、龍ノ口法難の時などでも「**これほどの悦びをわらへかし**」（**九一四頁**）などといって堂々としている。本当に大聖人様の生き方はすばらしいと思います。

また、その説かれている法華経の教理は「諸法実相」といわれるように、すべてのものは真実を表していて妙法蓮華経の当体でないものはない、という教えであります。

これは、我われがどんな境界にあっても、たとえ病気であろうが、あるいはまた悪いことをして刑務所に入っていようが、あるいは不測のことがあって世間の批判を受けて立ち直れないような立場にあろうが、あるいは智恵のあるなしにかかわらず、器量の良し悪しにかかわらず、すべてに人が妙法蓮華経の当体なんだと、肯定されているのであります。私は、こんな力強い教えというものは、他にはないと思います。

神に許しばかりを乞う罪深き人であったり、現実のこの身を厭うて浄土に願って生まれるというものではありません。ありのままのこの自分が、絶対に尊い存在だと説いている法華経の教え、それが我われが信仰している教えであります。

《大聖人の信仰を土台にした人生観を立てよ》

人生観を考える時には、色々なものがあるでしょうけれども、この大聖人様の信仰を土台にして答を出すことが、時流にも流されず、感情にも右往左往せず、常に本源を見失わないところの、腹の据わった揺るぎない人生を歩む、基本的な考え方ではないかと思うのであります。

即ち、大聖人様の信仰を土台に据えた人生観をしっかりと打ち立てて、なおかつ置かれた立場に随い、また能力や実力において、さらにはその人の健康状態であるとか好みといった千差万別の現実の問題をふまえつつ、信仰を土台にしたそれぞれに適った確かな人生観を打ち立てて、一度しかない人生を悔いのないようにしていきたいと思う次第です。（文責速記者）

【祝　七五三】

笹川博文君　五歳　箕面市
笹川智香子さん　五歳　香芝市
笹川大介君　七歳　香芝市
西村加那子さん　三歳　大和郡山市
今福麻衣さん　七歳　池田市
今井沙央里さん　三歳　住之江区
津山　結さん　七歳　箕面市
伊藤恭佑君　五歳　城東区
伊藤怜央君　三歳　城東区
源摩千鈴さん　三歳　豊中市
東野朋子さん　七歳　豊中市
虫辺清香さん　七歳　豊中市
虫辺伽織さん　三歳　豊中市

おめでとうございます。

いまも談所には日蓮関係の蔵書が、少しづつ増えている。ところで現在、宗門側寺院をふくめ、宗門発行の機関誌を完備したお寺が、どれほどあろうか。自宗の書籍が自由に読めなくては、正しい宗門史を考えるのは至難のワザである。

戦後まもない昭和二十二年七月、第六十四世・日昇上人のお代替り法要が奉修され

天地つかの間

〔その十〕

成田詳道

た。そのおり全国の法華講代表を集め「講頭会」が開かれた。当時の宗門機関紙『宗報』（正宗教報）によれば、議題は布教興学と本山経営、そして寺院教会の戦災復興である。出席者は三十数人で、戸田城聖、矢島周平、浅井甚兵衛といった中に、明比正行、小堤由三の名がみえる。

この両氏は市川市の弾正教会の講頭、総代で、三十年後に私が在勤した弾正寺の草創期から活躍した人々である。なかにも明比氏は、宗の内外に毅然とした行動や発言を投じている。弾正教会の主管が能勢順道師（現・観行坊）で、大塚興純師の居た時に、平安神宮の貴賓館で日本宗教革新懇談会と称し、当時の宗教界から二十数名の代表者を集め、弾正講講員との公開法論の記事もみえる。

昭和二十三年一月五日印刷納行　（郵便一部一円五拾銭）

日蓮正宗
宗報

昭和23年1月 合併
昭和22年12月
第16號

庶務短想

讀者の部屋

正法樹立の前程として
公場對決を要求す
弾正講　明比一時

正行

大聖人立正安國論に宣く「天下泰平國土安穏は君臣の樂ふ所土民の思ふ所なり夫れ國は法に依て昌へ法は人に因て貴し國滅び人滅せば誰か崇むべき法を誰か信ずべき法を立て佛法を立て言ずれば

宗

当時の日蓮正宗の機関誌『宗報』

氏は京都日々新聞社を経営し、戦後の一時期には本山の電気代を、毎月一人で支払ったことなどが、私の在勤時代までも年輩の方の語り草であったが、明比氏の子孫は一人も講中にいなかった。お色直しされた氏の板御本尊だけが、サラシに巻かれて本堂裏の奉安室に、永く安置されていたのを思い出す。当時うかつにも、私は噂話を聞きながら詳細を知らず、いまに機関誌でそれを知った。

総代の小堤氏も晩年には出家得度しているが、かろうじて法燈相続しているような状態だった。「一代法華」などという言葉があるが、あれほど宗門に尽力功績のあった人々の、後が続かないのはなぜだろうか。

あまり知った風なことを、言えた義理ではないのだが、往古はいざ知らず、近代の大石寺はご信者を大切にしない風潮が、ありはしなかったろうか。それはまた、ご信者に媚びへつらわない心意気の、裏表だったのかも知れないが。

日蓮正宗は世襲をしないのが特徴だが、世襲制の弊害ばかりをあげず、利点も勘案する必要があろう。草創期から苦楽を共にした住職が亡くなると、今まで縁もゆかりもなかった僧侶が赴任してくる。お寺と檀家の縁は常に薄い状態になる。もちろん、そこにも利点はあろうが。（源立寺執事）

「弟子分帳」と十七回忌〔四〕

松田銘道

三、「弟子分帳」と熱原法難

①熱原法難とその背景

熱原法難については、日亨上人が大正十一年に『熱原法難史』を発行されるまでは、法難の全容を明らかにした書物がなかっただけに、法難に関する資料を綿密に検討され、根拠が明確な資料によってその全容を解明された功績はまことに大きいものがありました。

日亨上人は、法難の研究を通して、六百五十年という長い歴史の中に埋もれたままになっていた理由を次のように推測されています。

「この法難の大切というところには、御門下の武門武士は一人もあづからず、斬罪・禁獄・追放二十人は、みな悉く土民百姓で、ことに近古まで尊敬を払われぬ社会の下級に甘んじた者であるから、自然に記述の光栄を得ざりしものと思われる。

また、折伏法度、御上の御無理御尤もの時代に、信仰の上とはいいながら、政府の役人の無理に伏しなかった事柄は書きにくかったであろう。

もし、はたしてそういう遠慮であったならば、土民すら義に当りてなお鼎鑊を辞せず法華の信念凝って鉄石のごとく、鏘々として音あり三千大千の国土を響かす、農民百姓の魂もなお武門武士の気迫を圧倒するありさま、あえて大いに伝えざるべからずである」

（『熱原法難史』三七頁）

たしかに、熱原法難は大聖人の弟子檀越の中でも一文不通の百姓の人びとが主役となった事件でありました。それらの人びとは、身をなげうって大聖人の教えを行じたのであり、その法難をのりこえた意義は非常に大きく、かつ重要であります。

ゆえに、日亨上人の研究を土台にして、今後とも大いに学び伝えてゆく必要性を強く感じます。しかしてその後、熱原法難に関する研究について、目を見はる論文が発表されたのは、日亨上人からも数々の教示を受けられた立正大学教授の高木豊氏が昭和四十年に発刊した『日蓮とその門弟』によってでした。そこで高木氏は「熱原法難の構造」との論文を掲載し、法難に関する研究成果を発表しました。

この論文では、大聖人の書状や日興上人の「弟子分帳」など、根拠が明確な資料を用い、また日亨上人の法難史の内容も随分取り入れつつ日興上人等の動向もよく把握されるなど、法難の全体像を詳しく論述されています。

例えば、「弟子分帳」に記された神四郎等の斬首については、次のように述べています。

「三人ともに唱題を唱え、念仏しなかったことは、かれらが唱題による救済の確

信をもっていたことを示している。……権力を背景にして、堕地獄の因である念仏を強要するもの――しかも頼綱は念仏者ではない――に対して唱題することは、かれらに残された唯一の抵抗の形態であった。宗教・思想の受容を、それによって信奉者の生活、あるいは生命すらも規制されてしまう状態と定義するならば、ひとは、ここに日蓮の宗教を真底から自己のものにした受容者を見出すことができるであろう。しかも、かれらは日蓮の宗教を信奉した翌年に、この状況に追い込まれたのである」

（『日蓮とその門弟』二一三頁）

ここには、「弟子分帳」に記述された神四郎等の信仰姿勢が見事に表現されています。

熱原一帯と潤井川（『日興上人』）

平左衛門親子が、蟇目（ひきめ）の矢を用いて念仏を唱えることを再三にわたって強要したにもかかわらず、捕縛された二十人全員が唱題によって乗り越えたその信仰心は、まさに大聖人の教えを「真底から自己のものにした受容者」といえましょう。

この斬首の様子を伝える大聖人の書状が、日興上人の写本が北山本門寺に現存する「聖人等御返事」であります。

「今月十五日〈酉時〉御文、同じき十七日〈酉時〉到来す。彼等御勘気を蒙るの時、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱え奉ると云云。偏に只事に非ず定めて平金吾の身に十羅刹入り易りて法華経の行者を試みたもうか」（全集一四五五頁）

この一文からは、鎌倉で捕縛された二十人全員が一歩も退くことなく弾圧をはねのけ、唱題をもってそれに応えたことを大聖人がいたく感嘆されたことが、事件の緊迫した状況――書状の冒頭に事件の様子を知らせた書状の日時と到着の日時が記され、さらに末尾には書状を発せられた時刻も記されていて、何か緊急を告げる特異な事件が生じていたと想像できる――とともにずしりと伝わってきます。

事件の様子が鎌倉から発信されたのが十月十五日で、身延の大聖人のもとへは普通四、五日かかるところを二日後の十七日には届いていることから、この書状がいかに急を知らせるものであったが知れます。

このことから、「彼等御勘気を蒙るの時」とは、神四郎等の斬首を示していて、その事件を知らせる書状が十五日に発せられているということから、斬首は十月十五日であるとする説が、現在の宗門では用いられています。

しかし、宗門が示した十月十五日説も、日道上人の「御伝土代」に、

「さてあつわらの法華宗二人ハくひをきられおハん、その時大聖人御かんあつて日興上人と御本尊にあそはすのみならす」

（歴全一―二六六頁）

と記述された、本門戒壇の御本尊の建立を示したと思われる記事との関連など、今後解明すべき問題も残っていますので、後にあらためて触れることにいたします。ちなみに日亨上人は日興上人の徳治三年の御本尊の脇書等から弘安三年四月八日と推定されています。

高木氏の論文には神四郎等の斬首のこと以外にも、注目すべき指摘が数多く見られますが、ここでは結論部分のみを紹介しておきます。

結論部分を紹介するまでに論述された項

目は、次の通りです。

一節　駿河における門弟の形成
（日蓮と駿河／日興の弘教活動）

二節　熱原法難の構造
（門弟への迫害／法難の推移／法難の構造）

以上の構成によって熱原法難の構造について緻密な検証をされた後、次のように結ばれています。

「①滝泉寺院主代と同寺に寄住する日蓮の弟子との対抗関係、②院主代＝在地有力者と日蓮の檀越＝百姓との対抗関係、③背景としての、得宗権力・得宗被官と日蓮の檀越＝御家人の対抗関係、等の上に織りなされた政治的・社会的・宗教的事件であった。そして、日蓮の門家に下圧した政治的権力のありかたは、在地統制の強化、得宗被官を支柱とする得宗独裁権力という、鎌倉政治史の弘安期を象徴するものであったといえよう」

（同二一七頁）

ここに指摘されているように、熱原法難は単に滝泉寺を中心とした在地有力者と熱原の農民との信仰上の諍いにとどまるものではなく、鎌倉幕府そのものが抱え込んでいた問題が強く働いています。

鎌倉幕府は、東国武士による政権であり、それまでの王朝による政権とでは、価値観においても異なることが生じていたようです。たとえば、網野善彦氏は次のように述べています。

「どうもその後の長い歴史を考えて見ますと、東国では、京都の王朝、あるいは南都（興福寺）北嶺（比叡山）の仏教の強い影響下にあった西国とは、『悪』、『悪人』についての捉え方が違っていたのではないかと私は思います。……たとえば鎌倉後期の政治問題になる『悪党』は、東国には余り出てきません。全く出てこないわけではありませんけれども当時問題だったのはなんといっても西国の『悪党』だったのであります。東国の『悪党』とは違った特色を西国の『悪党』は持っていたと思うので、これは東国武士によってつくられた政権である鎌倉幕府と、その支配下にあるか、あるいはそれを育てた東国と幕府によって新たな迫害をうけた西国との風土の違いを、今後考えてみる必要があると思います」

（『日本中世における「悪」の諸相』
―明治大学公開文化講座「悪」八四頁）

また、北条家を中心とする得宗支配の政治形態は、同時に得宗被官と御家人との対抗関係を産む構造をも抱え込んでいました。そして得宗被官のなかで最高の権力を手中にしていたのが、大聖人を竜の口にて首を刎ねんとしたあの平左衛門でありました。

熱原法難でも、その平左衛門が直接関与してきました。熱原法難が生じた富士地方が得宗領であり、そこで生じた事件が鎌倉で裁かれることになっていたとはいえ、「弟子分帳」に記されているように、二十人に対する裁判の有り様は異常ずくめでありました。

日興上人は、神四郎等の三人が首を刎ねられたのを「平の左衛門入道の沙汰なり」と記され、しかもその「子息飯沼判官（十三歳）」は「ひきめを以て散散に射て」、親子で「念仏申すべきの旨再三之を責」めあげた上、最後はとうとう神四郎等の「張本三人を召し禁て斬罪せし」めたのであります。

斬罪が平左衛門のみならずその子息も関与していること。また、念仏者ではないにもかかわらず念仏を唱えることを強要したこと。そして「御伝土代」に「その庭にて平さえもん入道父子うたれり。法華のばちなり」（歴全一―二六六頁）と、蟇目の矢を射たその庭において、正応六（一二九三）年四月に謀叛の咎にて平左衛門一族が滅ぼされたことが記されていることによって、

三人を斬首したその庭が平左衛門の館内ではなかったかと想像することができること。こうしたことから熱原の事件の審議から処罰の決定にいたるまで、平左衛門の意向に沿った形、もしくは親子の独断によって処理されていった可能性が非常に大きいと思えてなりません。

平左衛門の異常なまでの事件への関与からして、この法難はまさに「鎌倉政治史の弘安期を象徴する」事件であったといえましょう。

熱原法難については、高木氏の論文の影響もあってかその後、歴史学者も取り上げてきました。網野善彦氏が『日本の歴史』（一〇「蒙古襲来」）の中で、熱原法難についてかなり詳しく触れています。

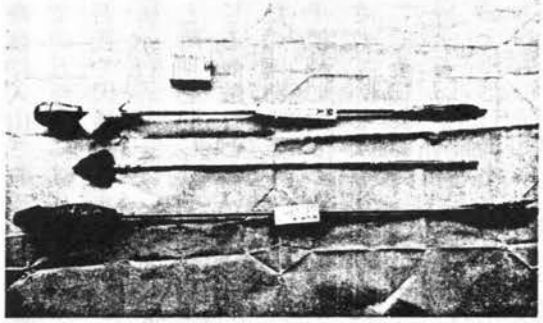
網野氏は、叡尊や忍性の得宗との結びつきが建長年間にさらに深まり、それによって、池上兄弟の父・康光や四条金吾の主人・江間光時が、ともに忍性を厚く信奉していたため、大聖人の教えを捨てるよう弾圧を加えてきたことを述べた後、これらの弾圧がさらに強められたのが熱原法難であるとして、法難の状況を次のように述べています。

「しかしそれ以上にきびしい日蓮の信徒に対する弾圧は、駿河国富士郡熱原でおこった。富士郡には南条時光をはじめ日蓮の檀越が多く、日蓮の弟子、蒲原四十九院の日興はそうした人々をとおして甲斐・駿河に日蓮の教えをひろめ、その門徒は数を増していた。富士郡下方熱原の滝泉寺の大衆日秀もその一人であった。だが、弘安元年ごろから、この地方の信徒たちに対する迫害がはじまり、日興は四十九院から追放された。ついで翌年、それは滝泉寺の日秀にもおよんでくる。富士郡下方は得宗領であった。滝泉寺院主代平左近入道行智は、、得宗の現地支配機関下方政所と結託（あるいは行智自身、得宗被官だったかもしれない）、日秀をはじめ信徒の百姓たちが、院主代の坊に押し入り、苅田狼藉をしたといいがかりをつけた。たちまち百姓たち二〇名が逮捕され、鎌倉に連行された。日蓮は日秀にかわって『滝泉寺申状』を書き、その無実を陳弁した。事実は逆である。行智が行なった苅田狼藉を日秀たちが阻止しようとしておこったのがこの事件である、と。

しかしこの陳弁は通らなかった。裁判にあたって、平頼綱は百姓たちに信仰の放棄を要求した（得宗領でおこった事件は、得宗の法廷で裁判が行なわれる）。とくに、当時一三歳だった頼綱の子息飯沼助宗は、蟇目（桐や朴の木でつくった鏃）の矢でさんざんに射て、百姓たちをなぶり脅し、『念仏をいえ』と迫ったという。だが、百姓たちは屈しなかった。三人は斬られ、のこりは禁獄された。残忍な強圧のなかで、かれらは終始、題目をとなえつづけて反抗し、死んでいったという。『悪党』（日興・日秀たちは「党類」といわれている）に対する禁圧は、このような酷烈さをもって進められていた」（二〇四頁）

引用が少し長くなりましたが、法難の起因を、得宗と忍性等との結びつきによるとの観点から述べられたこの記述は、法難の核心をよく突いていると思います。

「蒙古襲来」の発刊が昭和四十九



蟇目の矢（『日興上人』）

年でありますから、この論文を構想される中でおそらく高木豊氏の『日蓮とその門弟』における熱原法難関係の論文なども大いに参照にされたのではないかと推測するのですが、それにしても法難の全体像が、「弟子分帳」の記述を参照したと思われる内容となっていることは注目すべきことであります。

また、法難にいたる経緯を、四条金吾氏や池上兄弟に対する主君や親の弾圧が、良観等と得宗との結びつきと深く関係していて、それはまた熱原法難へと発展してゆく序章でもあったとの構想は、弟子檀越の法難と妙法授受のあり方を考える重要な指摘といえます。

例えば、池上兄弟に対する弾圧をこの観点から見てみましょう。

父・康光は、兄の宗仲氏を二度にわたって勘当するという強硬手段を、そして弟の宗長には、甘言による動揺を誘うという、兄弟の間を揺さぶる形で弾圧をかけてきました。その時、大聖人は次のように励まされました。

「がうじやうにはがみをしてたゆむ心なかれ、例せば日蓮が平左衛門の尉がもとにてうちふるまい、いゐしがごとく、すこしもをづる心なかれ」

（「兄弟抄」全集一〇八四頁）

ともかく、強盛に歯を食いしばって決して信心を退いてはならないと、大聖人は自ら受けられた法難の体験を通して兄弟を励まされています。そしてこの時、平左衛門とのことを強調して述べられていることは、非常に興味深いことであります。すなわち得宗体制による政権支配と、さらに叡尊や忍性との結びつきが、平左衛門による迫害という王難となってあらわれていることを大聖人は十分に承知されていたがゆえに、弟子檀越に対してもその可能性が充分あり得ることをここに示唆されていると思うのであります。

このことは同じく「兄弟抄」において、

「又第六天の魔王或は妻子の身に入って親や夫をたぼらかし、或は国王の身に入って法華経の行者ををどし、或は父母の身に入って孝養の子をせむる事あり」

（同一〇八二頁）

述べられていることからも知れます。

大聖人が池上兄弟に対して、法華経の行者には王難が押し寄せてくると述べられていることは、檀越にも法華経の行者としての証として王難を受けとめることを求められていたということでしょう。

その言葉がそのまま当てはまるかのように、大聖人が身延に入山されてから熱原法難が生じるまでの五年間には、池上兄弟をはじめ四条金吾氏や因幡房日永等、弟子檀越に対する迫害が目立って多くなります。そして、それと時期を同じくして熱原地方にも法難が生じる前触れともいうべき事件が頻発していたのであります。

大聖人の弟子檀越に対する弾圧の背景は網野氏も指摘されているように、「悪党にたいする禁圧」でありました。このことは、各地で弟子檀越が大聖人の教えを受持し、また熱原地方のように日興上人やその弟子方の弘教活動によって百姓の人びとも多く帰依し、その動きが得宗支配によからぬ影響を与えると判断されるまでになっていたことを示しています。（つづく・正覚院主管）

【訃報】

〔庄内地区〕

本行院法喜信士　十一月三日寂

俗名　川合僖太郎之霊　行年　七十六歳

謹んでご冥福をお祈りします。

ちょっと寄り道⑩

ラジアンって何だ？

伯耆の里　もりたかんどう

森田観道師

ラジアンという言葉をご記憶だろうか。『広辞苑』によると、

角度の単位。角の頂点を中心とする半径1の円からその角が切りとる弧の長さであらわす。一ラジアンは約五七度一七分四四・八秒。弧度。記号 rad

と記されている。たぶん高校あたりの数学で習ったのだろうが、こう辞書を見ても文科系の私には何の話だったか思い出すことができない。そこで『高校数学解法事典』なるものを引っぱり出して調べてみると、詳しすぎてこれまたよけいにわからなくなった。

いよいよ講習するソフトも「一太郎」と「ロータス123」と「桐」に決まった。不安な私は、あらためてS商会で行われている「BASIC（ベイシック）教室」を傍聴させてもらった。どんなふうに講習すればいいのか、ふだんのお寺での法話や講演とはまた違うだろうと思ったからである。このときの「BASIC教室」の講師はかつて私が受講し中途でやめたときの若い方とは違って、近くの工業高校のたぶん数学か何かの先生だろう、年輩の方だった。受講者はいっぱい。いちばん後ろの隅っこの席で、パソコンの講習というものはどうあるべきかと、固唾をのんで聞き耳を立てていた。

その先生の口から出てきたのが、さきにあげた「ラジアン」である。いま改めて『パソコンBASIC辞典』をひもとくとたしかにRADIANという単語（コマンド）はあるが、初心者があつかうものではない。聞いていた私は、ラジアンって何だ？　と一瞬クラクラッときた。このときの印象は鮮やかに私の脳裏に焼きついた。学校でもっと難しいことを教えている先生が、ふだんの授業のつもりで説明されたのだろう。これは、これからのパソコン講習に指針を求めていた私に貴重な示唆を与えてくれた。

この傍聴で私の基本方針は決まった。今後こちらがどれだけパソコンに習熟したとしても、受ける人はまったくの初心者だということをけっして忘れないこと、最終的には私と同レベルのパソコンユーザーになってもらえばよしとすること、基本を主とし受講者を迷わすような高度なものは紹介しないことなど、そんな講習を心がけることにした。

しかし、これらはなかなか難しいことであった。ふだん便利に使っていると、ついつい口に出てしまうのである。たとえば、BSキーの代わりに、CTRL（コントロール）＋Hキーを使えば、BSキーと同じ働きをする。便利だからと紹介すると、きまって混乱がおきる。そうならないようラジアンを思い出して、はやる心を抑える。

（大安寺住職）

〔寄稿〕

信行の実践と教学のすすめ

猪股正治　正豪

福重照平師著『信・行・学』の編集に携わられた猪股正治・正豪ご兄弟より、『恵日』誌に一文をお寄せいただきましたので、掲載させていただきます。

猪股氏は、中国の旧大連市生れ。ご両親は、戦前旧大連で正宗発心会の世話人をなされ布教に活躍、中心的役割を果たされた方です。

福重照平師（及びご子息の福重広輝氏）とは、昭和十七年秋に、師が布教師として発心会講中の総会に赴かれて以来の、お付き合いだそうです。

大連からは、終戦と同時にすべての財を現地にて放棄、裸同様にて帰国。福岡にて再び折伏等に精励されておられる方で、模範的な正宗信徒のご一家です。

＊＊＊

抜くことは、先ず難しい。世間では随分と乃公は忙しいからお勤めは失敬する事はあるが、信心は確かだ。お題目は忘れたことはないと自負する人もあるが、心で思っているばかりでは、末法に通用しない。之を色に顕して信行に移してこそ、初めて末法の信行堅固と云われる。心ばかりではドウモナラヌ。」

「因みに『新尼御前抄』に『御事にをいては御一味なるやうなれども、御信心は色あらわれて候。さど(佐渡)の国と申し、此の国と申し、度度の御志ありて、たゆむけしたゆむけしきはみへさせ給はねば、御本尊はわたしまいらせて候なり。』」(全集九〇七頁)

福重照平師著『信・行・学』

と、大聖人は御賞(おほめ)あそばされて、御本尊をお授けになっておられる。

私共は、生来の口下手、非力の身、一体何が出来ようか。自問自答の末、昔(四十余年前)照平房著の多数論文集を借り受け拝読。その魅力に惹かれて、無我夢中に書き留めていたノートに気付き、改めて反復拝読している中に、半世紀前の師の論文集が現在でも生きた法門であると感じ、抱え込んでいるのは勿体ない。之を再版することによって、広く一般の方々の教学の一助ともなり、化他行の実践ともなれば大聖人に奉る微志であろうと思い、再出版を決意したものです。亡き両親の仏縁に繋がっている今日の幸せは、両親が御本尊(三宝)に報恩回向(御供養)されていた姿がそのまま法統相続されたものであると確信して、感謝の念に堪えません。真の平和、現世に常寂光の楽土を願うならば、先ず正直者になる努力をなし、唱題に励まねばならない。御書並びに照平房師の説を引用しながら、信行に就いてあり方の概要、私なりに信念に基づいて述べさせて戴いた積もりです。

御書に、

「世出(せしゅつ)二道にわたつて日蓮一人正直者」

とのお言葉がございます。

醜(しゅう)なるものは我にありても之を醜とし、美なるものは人にありても之を美とする。職業・地位の上下を択ばず、唯自他を各々其の適する所に置かんとするからイザコザが起きぬ。不正直者はそうはゆかぬ。我にありては一切之を善とし、人にありては一切之を醜とする。唯地位と職業の高下を論じて、材の適・不適に関心しないからイザコザが絶えぬ。あわれ宗祖門下の御僧俗を始めとして、我が国内外人を問わず、正直の至徳を守れかし。されば宗門はもとより各界安寧、四海又静謐にして、広宣流布の聖願も満ち、現世寂光の楽土を実現するであろう。

終わりに大聖人「法華題目抄」の一節を拝見いたしませう。

「仏は正直を以て本とし、仏は正直を以て生命としている。正直は人間が仏と心を通ずる唯一の道である。」合掌。

〔手記〕

ある創価学会員の妻の記録〈二〉

仲井絲江

〈豊中市へ転居〉

昭和三十六年春、一家は豊中市に小さな家を買って移った。夫の会社は倒産したので、別のメンバーと新しい事業を始めたが、一向に好転せず、やりくりもままならない日々であった。

夫は益々学会に熱中し、私にも活動を強要した。店番という理由のなくなった私は、学会活動を拒めなくなった。私は夫からバイトやパートよりも、優先的に学会活動をすすめられ、心身の過労から、自律神経を失調した。

反抗して怪我をすれば、むしろマイナスと思ったので、灸をすえながら、豊中市内の会合に出席し始めた。

〈堺支部会に出席〉

ある日夫は、縦線の堺支部に大きな会合があるから、ぜひ出席して欲しいと、慇懃に頼んだ。夫の低姿勢に、何か役職を押しつけられるのでは……、と怪しんだが、

夫「大切な会合やから顔を出すだけでよい。」

私「もし何か命令されても、絶対引き受けませんよ。逃げて帰りますよ。」

と念を押し、妥協して付いて行った。

堺の大会場に着くと、幹部達が、

「お似合いのご夫婦ですな……。」

と美辞麗句を連発。やがて一人が、

「奥さんもご一緒に組担（組担当員）を引き受けていただけませんか。」

ほらやっぱりと思った私は、辞退したが、

幹「決して難しい役ではありません。奥さんなら充分過ぎるほどです。」

こんなだまし討ちに負けてたまるもんか——、ムカムカした私は、ただ出席するだけと偽って呼び出した幹部の卑劣さもさりながら、同調した夫に一層憤慨した。

大会場では、百人近い信者の唱題が始まった。幹部に囲まれて正座した私は、脱出の策を考えた。

「トイレはどちらですか。」

用を済ませた私が、そっと会場を見ると、唱題は読経に変わっていて、私が外に出たことを、気付く人はいなかった。

〈堺駅前にて〉

脱出した私は、すぐ横道にそれ、折りよく来たバスに飛び乗って、堺駅前に着いた。ステップを降りようとすると、「コラッ」と夫の大声、むんずと私の腕を掴んだ怒りの顔は、羅刹のようであった。逃走に気付いた夫は、自転車で駅前へ追いかけて来たのであった。

降車口は大勢の人だかりとなり、駅員が二人かけつけて「ポリボックスへ逃げなはれ」と誘導してくれた。私は口はカラカラ、胸はドキドキ、かけ込んできた夫に、

警官「一体あんたたちはどんなご関係ですか」

夫「夫婦や。」

警「そんなら、家へ帰ってから、ゆっくり喧嘩して下さい。」

夫は自転車で立ち去り、私は警官に丁重に礼を述べて帰宅した。

一を許せば十、十を許せば百までエスカレートする夫の性癖を、私は熟知していたから、——ここで妥協したら、地獄の底まで引きずり込まれる——と必死で心に叫んだ。

堺駅前の一件は功を奏し、以来夫は、堺支部への出席を強要しなくなった。この日のビデオが残っていないのは、残念至極。

〈借家への転宅〉

夫の事業は好転せず、昭和三十七年、小さな家も手放して、同じ豊中市内の三戸続きの借家へ移った。夫は、家財を押し込めるや否や、「班長が座談会に遅れたらあかん。」と堺へ走って行った。

転宅翌日、近所のB担（ブロック担当員）さんの訪問を受けた。人品賤しからぬ聡明な婦人。吾が家の窮状を訴えると、よくご理解下さった。

「お宅のご主人の信心は、間違うてはると思います。何はさておき、まず狂信を改めて貰うことが先決ですが、私はB担に過ぎず、年上の殿方にご忠告する資格はありません。もっと上級幹部に訴えなさい。」

と次々大幹部を紹介して下さった。

大B長、市会議員、府会議員、遂には関西におけるトップクラスの婦人部長にまで訴えた。大幹部は、さすがに夫の非を認めて下さったが、

「貴女の信心も足りません。もっと真剣に活動しなくては宿命の打開は出来ません。」

というセリフが、共通の結論で、藁をも掴む思いの私にとっては、何の解決策も得られなかった。

ある時、夫は私に無断で、大客殿建立の御供養に参加した。後日そのことを知った私は、金額の多少にかかわらず、信者としてあるまじき行為と、大いに憤慨した。夫は、双方の親戚の忠告も馬耳東風、かけ込み寺のない私は、万策尽きて、途方に暮れるのみであった。

そんなある日家主が、

「両隣から勤行の声がやかましいと、度々文句が出ているので、移って貰えないか。」

と申し出られ、夫は即座に転宅を承諾し、曽根駅前に並んでいる斡旋屋を訪ねた。

〈素敵な借家決定〉

子供たちの通学の便を考えて、豊中・池田・箕面の三市に場所を絞り——家賃一万円まで、親子四人の住める家——ただこれだけの条件でも、どの店も、「一万円では無理」と断られた。ふと夫の胸を見ると、背広の衿の、創価学会のバッヂが裏返っている。

私「学会のバッヂが裏返ってます。なんで？」

夫「わざと裏返してるねん。学会員やと分かったら、ええ家貸してくれへん。座談会や選挙で人の出入りが多いから、敬遠されるねん。」

「バカモン！」と私は大声で怒鳴りたかったが、道の真ん中だから声をひそめて、

「胸張って誇れんような信心やったら、今日限りやめなはれ。学会員として失格です。即刻バッヂを表返しなさい。」

夫は渋々バッヂを表返した。

次の店へ入ると、店主は目敏(めざと)く胸のバッヂを見付け、笑顔で、

「おや学会員さんですか。どんなご注文ですか。

夫「カクカク、シカジカ。」

店「実は表に貼り出してないけど、学会員さんならと、特に取って置きの物件がありますねん。家賃一万円、阪急箕面駅から少々遠いのが玉に瑕。一戸建て、京間で床の間あり。三方空き地、隣家の声も聞こえない。見晴らしは広々、家主が自分の隠居所に建てた家やから木材は上等、こんな安い家は滅多におまへんで。」

と間取り図を見せてくれた。夫は大満悦で、即座に決定、双方大喜びで握手。

「お母ちゃんの言うとおり、バッヂを表返した功徳や。」

と、私もその不思議さに驚いた。早速B担さんに報告すると、

「箕面には、高石地区部長という、学会には稀な、良識ある幹部が居られるので、きっと適切な指導が得られると思います。ああ、よかった、よかった。」

とまるで我が事の様に喜び安心して下さった。

〈箕面市への転居〉

三十八年八月、息子の友人の高校生数人の応援で、一家は箕面市へ転居した。斡旋屋の言葉に偽りはなく、借家とは思えぬ素敵な家であった。夫は運び込んだ荷物を、周囲の広い空き地に置いたまま、堺支部へと走って行った。翌日から早速、老若男女の学会員が、続々ご来訪。転宅早々の吾が家を、どうして皆さんがご存知なのだろうと思ったが、実は豊中から事前に転入の連絡があった由である。

その時箕面は、市議選の真っ最中で、公明党の新人候補は苦戦中、村から出ている自民党候補は、当選数回のベテラン。

「何とか一票でも力を貸して貰えまいか。転居直後三ヶ月間選挙権はないが、市内に一人でも知人があれば頼んでほしい。」

というのが、学会員共通の訪問理由であった。

幸い私は、少女時代の友人が数人いたので、早速転居の挨拶に訪ねたついでに、公明党を頼んでみたところ、旧友達は、子供の中学時代の恩師で、まじめな方だからと、快諾してくれた。私は政治と野球に関しては、ほぼ音

痴に近いほど無関心で、公明党についても、何の知識もなかった。ただ、日蓮大聖人の教えを根本にした政党であるから、不正を働かないであろうことだけを強調した。早速来訪の幹部に報告すると、大感激。噂は忽ち広まって、引っ越し早々の私は、熱心な活動家としてマークされ、拠点と称する大きな家へ、毎日誘い出された。

壁には、池田会長の写真が掲げられ、団結・必勝の文字が躍る。得票の成績が棒グラフで示され、信者達の題目闘争の声が朗々と響く。新入りの私までが、その渦に巻き込まれた。帰宅は夕方、引っ越しの後片づけどころではないが、お陰で忽ち何十人もの知人を得て、数年間住み馴れたような錯覚さえ持った。

かくて、熾烈を極めた市議選が終わり、蓋を開けると、ベテランの自民党候補は落選、公明党の新人は当選、その差は僅か十一票。村人にとっては、正に青天の霹靂、学会員は欣喜雀躍、十一票の僅差の中に、私の友人の票が、果たして何票あったかは判らないが…。

曽根の斡旋屋が、特別に良い家を世話してくれた理由が、やっと判った。学会員の団結、公明党の組織網、その巧妙さには、まったく頭が下がる。バッヂを表返したために、忽ち効果があったのは、まさに現証そのものであった。

〈高石地区部長への挨拶〉

市議選が終わったので、私は早速、高石地区部長を訪問した。

「おいでやす、まあ上んなはれ。」

と、大阪弁丸出しの第一声に、先ず安堵した。如是相（人相のこと）のよい地区部長は、温顔をほころばせ、快く招き上げて下さった。幹部らしい偉ぶった点の微塵もない、円満な親しみやすいタイプの方で、初対面の挨拶をすませると、

「あああんたが今度転入してきた人だっか。実はこないだ豊中から連絡があったんで、待ってましたんや。まあこれから仲ようしまひょ。何時でも相談に来とくなはれ。」

という調子。

話上手・聞き上手の地区部長に、私はすっかり気を許して、ありのままに今までの吾が家の経緯を概略説明した。地区部長は、一々頷きながら聞いて下さり、

「実はな、『主人公は、まじめですなおで熱心な信者やけど、付いてる奥さんが、箸にも棒にも掛からん人で、幹部も持て余してる。箕面へ行ったら、高石さんやないと、守りの出来ん人やから、よろしゅう頼む』と言うて来てまんねん。どんな怪態な人かと思てたけど、あんた、ちょっとも怪態な人やあらへん、まともな人や。」

と笑いながら、

「よっしゃ、よう解った。あんたの言う通りや。主人の方が間違うてる。今後は何かあったら、みんなわしとこへ言うて来なはれ。わしから注意したげまっさ。喧嘩して痛い目に合うたら、つまらんがな。」

とて、その日は終った。この人についてなら、夫と共に学会活動が続けられそうだと思った。

「早速ご主人も」という地区部長のお招きにより、数日後、夫もお伺いした。高石氏は夫にも、「世法成らずんば仏法成らず」「御みやづかいを法華経とおぼしめせ」等の御金言を引いて、諄々と説得され、「生活第一・信心根本」と諭された由である。吾が家へも度々家庭訪問に来られ、その都度生活に即した指導を続けて下さった。

幸いなことに、夫も高石氏の人柄に、親近感をもって敬服し、素直にその言葉に従った。身近に忌憚なき苦言を呈してくれる先輩を持たなかった夫にとって、軍隊や職業上の関係を離れた良き指導者は、おそらく高石氏が初めての得難い存在であっただろう。四歳年上の高石氏は正に兄貴分で、箕面在住中数年に亘り、折にふれて、もろもろの相談に乗って下さったことは、誠に幸運であった。

〈学会活動の停止処分〉

高石氏は早速、具体的な緊急措置をもって、吾が家の危機を救って下さった。先ず縦線を堺から箕面に移し、縦は箕面地区、横は箕面総ブロックとなった。

これによって堺への交通費も時間も、どれ程助かったか知れず、縦横共に箕面市で高石氏の指導によって活動することが出来、吾が家にとって万事好都合となった。

続いて夫に、学会活動停止処分が言い渡された。吾が家の経済が一応安定するまで、仕

事に専念すべきこと、余程大切な会合以外は、学会活動を休み、朝夕の勤行は欠かさず、地道な信仰を続けるべしと通達され、総ての役職は解任された。夫は思いがけぬ発令にも、驚くほど素直に納得した。

〈ピンチヒッター〉

高石氏は、私に夫の身代わりとして、学会活動に精進するよう勧められた。いわゆるピンチヒッターである。私は何の抵抗もなく、その勧めを受け、翌日から熱心な学会員として活動を開始した。私が選手交替して出席することは、夫の仕事を助けるための内助の功に当たると納得したからである。

「あんたは家計のやりくりと、最少限度の補足的なバイトの他は、精一杯学会活動をしなはれ、男は外で働き、女は家を守り、余暇を最高に活用して信心する。これが一番まともな道だす。主人の収入だけでやりくりし、たとえ塩なめてでも、沢庵かじってでも、主人の収入では、これだけの生活しかできまへんと言いなはれ。」

「聖教新聞は一部、学会の出版物その他一切断りなはれ。学会は押し売り団体やない。文句言うたらわしに直接訴えに来なはれ。」

と励まして下さった。

身代わりとなった私が、快く学会活動に励む姿に、夫はすっかり安心し、狂信はめでたくピリオドを打ったのである。思えば夫は、誠に素直で純真な人で、裏返せば単純で自主性に欠ける人であったと言えようか。

〈夫の就職〉

夫の事業不振はなおも続き、高石氏からは就職を勧められた。

夫も戦友・知人に頼んでみたが、適当な職場が見つからず、困惑していた。そんな時、高校生の三男が、

「一遍大阪天満の職業安定所へ行ってみたら、色々ええ仕事あるかもしれへんで。」

とアドバイスしてくれた。

早速、負うた子に教えられて、早朝から五千遍のお題目を唱え、職安へ出かけた。

職安へ着くと折りよく、和菓子京都橘屋の、主任募集があったので、早速その足で、指示されている心斎橋店へ向った。丁度本店から社長が来て居られ、まるで待ち合わせたように面接、双方阿吽の呼吸が合って即座に決定。

社長の望まれる数項目の条件が、ピタリと合った上に、

①中肉中背、むしろやや小柄の方がよい。

②大阪弁、標準語ともに、ハキハキ喋れる。

③読み易い字を毛筆でスラスラ書ける。

といったような細部に亘る希望までが、全く一致した。

こんな適材適所の仕事が、早速見つかるなんて、功徳としか言いようがない。翌日夫婦で来るようにとご指示を受けたので、私も本店へ参上して、社長夫妻にお目にかかった。

社長は夫よりも五歳年上、一代で従業員百人余の会社を築き上げられた苦労人。以後数年間の在職中は、何かと優遇していただいた上に、家族に対しても、様々のご配慮をいただいた。私も全国の得意先への、年賀状や暑中見舞いの表書きを頼まれるなど、結構なボーナスになった。

〈矢の走ることは弓の力〉

夫は以来、誠心誠意勤めに励み、正に宮仕えを法華経と心得た働きぶりであった。漸く収入は一定し、不十分なりにも、生活の設計を立てることが出来るようになった。

「猿の水練、魚の木登り」と諺にもある通り、本来の性分に向かない商売の道を捨てて就職し、数年後には、取締役にも選ばれたことは誠に功徳であった。

「や（箭）のはしる事は弓のちから……をとこ（夫）のしわざはめ（女）のちからなり」（「富木尼御前御返事」全集九七五頁）

「女人となる事は物に随って物を随える身なり」（「兄弟抄」全集一〇八八頁）

と、御金言を引いて高石氏は、私の学会活動が、夫の精勤のもとになっていることを、喜んで下さった。

（次号につづく）

法華講全国大会について

明年の法華講全国大会は房総聖跡研修旅行をかねて実施する事になりました。募集要領および行程は追ってご案内します。

記

日時　平成八年五月二十六日(日)一時

場所　日比谷公会堂（東京）

十二月の行事

一日（金）　午後二時　お経日（講話）
三日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会
七日（木）　午前十一時　広基寺お会式
十日（日）　午後一時　お講・役員会
十三日（水）　午後一時　お講
十七日（日）　午前十時　大掃除

今月の宅お講

二日（土）　午後一時半　槻木地区（山田直輝宅）

【師走詠草】

命いのち　今も生かさるる　この命　戦野かけきし　若き日の命　〔橋本　義一〕
今一度　瀬戸の茶碗に　飯もりて　食って逝きたき　激戦の日日

後姿（うしろで）の　姑（はは）の写真の　セピア色　紫紺の羽織　まなうらに顕つ
銀鼠（ぎんねず）と　紫の矢絣　着しわれの　若き日偲ぶ　モノクロ写真　〔橋本　円子〕

【恵日俳壇】

御会式に　身は行けねども　心行く　〔宮下　留代〕
美しき　天上見上げ　冬始め　〔　同　〕

恵日　平成七年十二月号　通巻十号
平成七年十二月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道

発行　恵日編集室
〒五六三　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一－三一三五
購読料　定価一〇〇円（〒別）

恵日　十二月号　通巻十号　平成七年十二月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒五六三　池田市槻木町一－一〇　源立寺内　恵日編集室　定価一〇〇円